近世近代における上方語の格標示について
～有標主格言語成立の一例～

坂井美日（鹿児島大学）

霞亭文庫画像『興斗月』

1

1

現代京都方言

(1)京都市1980年生、女性（2020.9調査）

a. どっち｛が／Ø*｝どっち｛を*／Ø｝食べんの？

b. だれ｛が／Ø｝来たん？

- 形態的に、主格に有標傾向、対格に強い無標傾向。
  ⇒有標主格性がある。
- 本発表では、京都方言に有標主格性が生じた歴史を考察する。

2

2

主格-対格型とは

主格-対格型
・他主(A)と自主(S)が同標示。 ・他目(P)が異標示。
他動詞文　主格 (主語) A　(目的語) P 対格
自動詞文　S

3

3

絶対格-能格型との比較

主格-対格型	絶対格-能格型
・他主(A)と自主(S)が同標示。 ・他目(P)が異標示。	・他目(P)と自主(S)が同標示。 ・他主(A)が異標示。
他動詞文　主格 (主語) A　(目的語) P 対格	能格 A　P 絶対格
自動詞文　S	S

4

4

一般的な有標／無標

- 一般に主格-対格型は有標対格。絶対格-能格型は有標能格。

	主格-対格型	絶対格-能格型
他動詞文	(主語) (目的語) $A_{ø}$ 主格 P 対格	能格 A　$P_{ø}$ 絶対格
自動詞文	$S_{ø}$	$S_{ø}$

5

5

一般的な有標／無標

- 一般に主格-対格型は有標対格。絶対格-能格型は有標能格。

	主格-対格型	絶対格-能格型
他動詞文	(主語) (目的語) $A_{ø}$ P	A　$P_{ø}$
自動詞文	$S_{ø}$	$S_{ø}$

➢ 他動詞文で、主／目を相互識別するため、一方を有標に。

6

6

一般的な有標／無標

- 一般に主格-対格型は有標対格。絶対格-能格型は有標能格。

	主格-対格型	絶対格-能格型
他動詞文	(主語) (目的語) $A_{ø}$ P	A　$P_{ø}$
自動詞文	$S_{ø}$	$S_{ø}$

➢ 自動詞文は、A／P識別の必要がなく一般に無標。

7

7

一般的な有標／無標

	主格-対格型	絶対格-能格型
他動詞文	(主語) (目的語) $A_{ø}$ P	A　$P_{ø}$
自動詞文	$S_{ø}$	$S_{ø}$

➢ 他動詞文でPを有標にして識別→「主格-対格型」
➢ 他動詞文でAを有標にして識別→「絶対格-能格」

8

8

有標主格＝‘the anomalous case system’

	一般的な対格型	有標主格の対格型
他動詞文	A ø　P	A　P ø
自動詞文	S ø	S

9

9

有標主格＝‘the anomalous case system’

	一般的な対格型	有標主格の対格型
他動詞文	A ø　P	A　P ø
自動詞文	S ø	S

A/P識別が不要であるSまで有標。
→‘the anomalous case system’ (Cysouw 2005)

10

10

有標主格の歴史研究

➢有標主格言語は希少と言われている。

(2) Cysouw (2005)が挙げる該当言語の例

・アフリカ（アフロアジア語族）

・カリフォルニア（ユーマ語族、マイドゥ語族、ワッポ語等）

消滅危機　消滅

➢従来、上記言語のデータが少ないことから、歴史研究はほとんど進んでいない（後述するKönig 2006の考察のみ。）

11

11

本発表の位置づけ

- 日本京都方言には、有標主格（性）が認められる。
- 日本京都方言には、豊富な歴史資料がある。
- 文献学的検証により、有標主格成立の一例を示せる。

12

12

本発表の概要

- 京都方言の有標主格はいつ成立したか。
- 京都方言が有標主格となったモチベーションは。
- 京都方言の有標主格が成立したプロセス。

13

13

本発表の概要

- 京都方言の有標主格はいつ成立したか。
  →19Cまでには成立。
- 京都方言が有標主格となったモチベーションは。
- 京都方言の有標主格が成立したプロセス。

14

14

本発表の概要

- 京都方言の有標主格はいつ成立したか。
  →19Cまでには成立。
- 京都方言が有標主格となったモチベーションは。
  →主／目の相互識別ではなく、情報構造上の識別。
- 京都方言の有標主格が成立したプロセス。

15

15

本発表の概要

- 京都方言の有標主格はいつ成立したか。
  →19Cまでには成立。
- 京都方言が有標主格となったモチベーションは。
  →主／目の相互識別ではなく、情報構造上の識別。
- 京都方言の有標主格が成立したプロセス。

Ⅰ：項標示と情報構造標示は別スロット→格配列は有標対格性
Ⅱ：属格の主格化で、項標示と情報標示が対立→徹底有標へ
Ⅲ：情報構造優先で過剰標示の整理→対格無標化

16

16

格の歴史に関する従来説

17

17

従来説の整理（築島 1963、野村1993、竹内 2008、金水 2011等）

【中古期 (8C~12C)】

➢**目的語の形態的標示**

•節の主従に関わらずØ／ヲ。ヲの有無は任意（文体的な事情）。

➢**主語の形態的標示**

•主節の主語標示はØ。

•連体修飾節等では、属格ガ／ノが主語標示に見えるものあり。（属格主語標示）

中古	主節	従属節
目的語	Ø／ヲ	Ø／ヲ
主語	Ø	Ø (属格主語標示ガ／ノ)

18

18

従来説の整理（築島 1963、野村1993、竹内 2008、金水 2011等）

【中世期 (13C~)】

➢**目的語の形態的標示**

•前時代と特に変わらず（節の主従に関わらずØ／ヲ）。

➢**主語の形態的標示**

•主語標示ガ／ノ発達。

•主節においても、ガ／ノが主語に付接。

中世	主節	従属節
目的語	Ø／ヲ	Ø／ヲ
主語	Ø／ガ／ノ	Ø／ガ／ノ

19

19

従来説の整理（築島 1963、野村1993、竹内 2008、金水 2011等）

【現代】

➢**目的語の形態的標示**

•節の主従に関わらずØ／ヲ。

➢**主語の形態的標示**

•主語標示はØ／ガ。ノは従属節内に残るのみ（いわゆるガノ交替）。

現代	主節	従属節
目的語	Ø／ヲ	Ø／ヲ
主語	Ø／ガ	Ø／ガ（／ノ）

20

20

従来説の整理（築島 1963、野村1993、竹内 2008、金水 2011等）

【現代】

➢**目的語の形態的標示**

•節の主従に関わらずØ／ヲ。

➢**主語の形態的標示**

•主語標示はØ／ガ。ノは従属節内に残るのみ（いわゆるガノ交替）。

現代	主節	従属節
目的語	Ø／ヲ	Ø／ヲ
主語	Ø／ガ	Ø／ガ（／ノ）

さらに近年の研究で、有標無標の偏りが明らかに。

21

21

現代京都方言における有標／無標の偏り

(1)にも示したように、

- 有形標示を用いるとすれば、主語側。
- 目的語は、基本的に無標。

→有標主格性がある（c.f. 竹内氏近刊、中川氏の発表）

現代	主節	従属節
目的語	Ø（／ヲ）	Ø（／ヲ）
主語	Ø／ガ	Ø／ガ（／ノ）

22

22

有標対格性から有標主格性？

中古	主節	従属節
目的語	Ø／ヲ	Ø／ヲ
主語	Ø	Ø (属格主語標示ガ／ノ)

現代	主節	従属節
目的語	Ø（／ヲ）	Ø（／ヲ）
主語	Ø／ガ	Ø／ガ（／ノ）

➢ 二者間にあたる近世（特に18C～19C）を中心に調査。

23

23

データ

- 京都洒落本を調査。
  18C: 『原柳巷花語』（シマバラヤサモノガタリ）
  19C: 『興斗月』（キョウトツキ）
- 会話部から主語と目的語の標示を調査｛Ø／ガ／ノ／ヲ／ハ｝
- 会話部でも、歌などで古いスタイルをとる部分は除外。

24

24

有標／無標

18C	ø	有標	計
目的語	4 (7%)	53 (93%)	57
主語	3 (3%)	98 (97%)	101

- 主目ともに、ほぼ有標。
- Øは稀。

徹底有標

25

25

有標／無標

18C	ø	有標	計
目的語	4 (7%)	53 (93%)	57
主語	3 (3%)	98 (97%)	101

- 主目ともに、ほぼ有標。
- Øは稀。

徹底有標

19C	ø	有標	計
目的語	32 (91.4%)	3 (8.6%)	35
主語	8 (15.4%)	44 (84.6%)	152

- 目的語標示が、ほぼ無標に。
- 主語標示は、ほぼ有標。

有標主格性

26

26

有標／無標

18C	ø	有標	計
目的語	4 (7%)	53 (93%)	57
主語	3 (3%)	98 (97%)	101

19C	ø	有標	計
目的語	32 (91.4%)	3 (8.6%)	35
主語	8 (15.4%)	44 (84.6%)	152

➢徹底有標の対格型から、有標主格へ。
➢少なくとも19Cまでには有標主格化していた。

27

27

18Cの徹底的な有標は、文法か？文体か？

●中世（16C以降）口語資料から徹底有標の傾向（竹内氏発表）。
●従来のとらえ方：文体の問題。
(2) 金水 (2011)
・一般に「無助詞名詞句を許さない」という制約は、私的な話し言葉では当てはまらず、方言でも当てはまらない。
・歴史資料上、格の有標無標はジャンルで偏りがある。

↓

中古から現代まで、主目のØ標示は潜在的に可能であったと仮定でき、その上で、目的語の標示は方言や文体や規範意識で割合が変わる。

28

28

18Cの徹底的な有標、文法の可能性は皆無か？

【文献学】今回は洒落本ジャンル限定。会話部に口語性追求。
【方言】徹底有標の体系は、方言に実在（熊本、宮古等）。
【類型論】他言語における有標主格成立の事例と類似性あり。
(3) König (2006)：アフリカの諸言語の観察による一般化
対格型言語から有標主格が生じる場合、
1. 格以外の要素から主格を獲得し、
2. 徹底有標から、対格が音韻的事情で落ち、有標主格へ。

文法として再検証する価値はあるのでは。

29

29

文法であると仮定する場合に再考すべきこと

➢有標対格（中古期）から徹底有標（中近世期）までのプロセス
➢徹底有標から有標主格性（近世19C）へのプロセス

• 再考にあたっては、主／目相互識別の観点を離れる必要。

18C	Ø	ガ	ノ	ヲ	ハ	計
非他主	3	39	9	0	45	96
他主	0	2	3	0	0	5
他目	4	4	0	44	5	57
計	7	45	12	44	50	158

• ガ（ノ）は非他動詞文にこそ多用。
• ガ（ノ）ヲは、自他の弁別に、そこまで寄与していない。

項構造だけでなく情報構造を踏まえた考察が有効

30

30

本発表の仮説

• 歴史資料の観察から、以下の仮説。
Ⅰ：項標示と情報構造標示は別スロット→格配列は有標対格性
Ⅱ：属格の主格化で、項標示と情報標示が対立→徹底有標へ
Ⅲ：情報構造優先で過剰標示の整理→対格無標化

31

31

Ⅰ：項標示と情報構造標示は別スロット→格配列は有標対格性

➢ 中古期の名詞句・格標示・ハ、ゾの共起（日本語歴史コーパス使用）
・主語単独、主語＋ハ、ゾ（連体節等のみ：主語的名詞句＋ガ、ノ）
・目的語単独、目的語＋ハ、ゾ、ヲ、ヲハ（ヲバ）、ヲゾ
・ニ、ニハ、ニゾ、マデ、マデハ、マデゾ…

⇒中古期の名詞句の構造：[名詞句－項標示－情報構造標示]

	項標示	情報構造標示
名詞句	中心項（主目）：Ø （任意）目的語：ヲ 周辺項：ニ、マデ…	主題：ハ 焦点：ゾ 非主題・非焦点：Ø

システム外　主語標示に見えるガ／ノ（あくまで属格）

• なお、ガノとハゾは共起せず
（連体節（名詞節）の中では、主題化も焦点化もされないため。）

32

32

Ⅱ. 属格の主格化→徹底有標へ

- 中世以降
  - ・連体節（名詞節）の主節化に伴い、属格主語標示も主節に進出。
  - ・並行し、属格主語標示の主格再解釈も進行。
  - →主節に、主題ハ・焦点ゾと共起しない＝対立する有形の主語標示※。

	項標示	情報構造標示
名詞句	中心項（主目）：Ø （任意）目的語：ヲ 周辺項：二、マデ…	主題：ハ 焦点：ゾ 非主題・非焦点：Ø

主語標示？ガ／ノ

※日本歴史コーパスの調査では、時代を通してガ／ノとハ・ゾの共起例なし。
ただし、焦点に関しては、宮古語の=ga=du(=NOM=FOC)等もある。
→本質的なのは、主題との対立と考えられる。

33

33

Ⅱ. 属格の主格化→徹底有標へ

	項標示	情報構造標示
旧	中心項（主目）：Ø （任意）目的語：ヲ 周辺項：二、マデ…	主題：ハ 焦点：ゾ 非主題・非焦点：Ø
新	項・情報構造？	
	ガ／ノ ハ ゾ	

34

34

Ⅱ. 属格の主格化→徹底有標へ

	項標示	情報構造標示
旧	中心項（主目）：Ø （任意）目的語：ヲ 周辺項：二、マデ…	主題：ハ 焦点：ゾ 非主題・非焦点：Ø
新	項・情報構造？	
	ガ／ノ → ハ 主題 ガ／ノ → ゾ 焦点	

35

35

Ⅱ. 属格の主格化→徹底有標へ

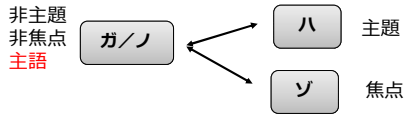
	項標示	情報構造標示
旧	中心項（主目）：Ø （任意）目的語：ヲ 周辺項：二、マデ…	主題：ハ 焦点：ゾ 非主題・非焦点：Ø
新	項・情報構造？	
	非主題 非焦点 ガ／ノ → ハ 主題 ガ／ノ → ゾ 焦点	

36

36

Ⅱ. 属格の主格化→徹底有標へ

	項標示	情報構造標示
旧	中心項（主目）：Ø （任意）目的語：ヲ 周辺項：ニ、マデ…	主題：ハ 焦点：ゾ 非主題・非焦点：Ø
新	項・情報構造？	

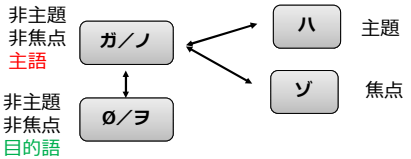


37

37

Ⅱ. 属格の主格化→徹底有標へ

	項標示	情報構造標示
旧	中心項（主目）：Ø （任意）目的語：ヲ 周辺項：ニ、マデ…	主題：ハ 焦点：ゾ 非主題・非焦点：Ø
新	項・情報構造？	



- 移行期はこの旧体系と新体系が混在

38

38

Ⅱ. 属格の主格化→徹底有標へ

	項・情報構造
移行 混在期	ガ／ノ／Ø　非主題・非焦点・主語 Ø／ヲ　非主題・非焦点・目的語 ハ　主題 ゾ　焦点 Ø　非主題・非焦点

Øの機能が多岐→Øを避ける方向に変化しうる。

39

39

Ⅱ. 属格の主格化→徹底有標へ

	項・情報構造
中世 近世期	ガ／ノ　非主題・非焦点・主語 ヲ　非主題・非焦点・目的語 ハ　主題 ゾ　焦点

徹底有標

40

40

京都方言は、Ⅱの体系でゾ消失

	項・情報構造
近世前期	ガ／ノ　非主題・主語 ヲ　非主題・目的語 ハ　主題

41

41

Ⅲ：過剰標示の整理→対格無標化

	項・情報構造
近世前期	ガ／ノ　非主題・主語 ヲ　非主題・目的語 ハ　主題

徹底有標を過剰と解釈すれば、
マーカーを減らす方向に動く可能性

42

42

18Cデータ内訳

18C	Ø	ガ	ノ	ヲ	ハ	計
非他主	3	39	9	0	45	96
他主	0	2	3	0	0	5
他目	4	4	0	44	5	57
計	7	45	12	44	50	158

43

43

18Cデータ内訳

18C	Ø	ガ	ノ	ヲ	ハ	計
非他主	3	39	9	0	45	96
他主	0	2	3	0	0	5
他目	4	4	0	44	5	57
計	7	45	12	44	50	158

主語Ø3例…他の部分に比べ文体が特殊（枕を使う等決まり文句的）

(3)かわたけのつみØふかくらいせまでまよひましよ。

「（私は）川竹の（流れの身の遊女として）罪が深く、来世まで迷うことでしょう。」

→当時の口語の例か微妙。口語としてはØ不可が強かった可能性。

44

44

18Cデータ内訳

18C	Ø	ガ	ノ	ヲ	ハ	計
非他主	3	39	9	0	45	96
他主	0	2	3	0	0	5
他目	4	4	0	44	5	57
計	7	45	12	44	50	158

- 主語標示ガ（ノ）は、主／目の識別が不要な非他動詞文主語に多用。

45

45

18Cデータ内訳

18C	Ø	ガ	ノ	ヲ	ハ	計
非他主	3	39	9	0	45	96
他主	0	2	3	0	0	5
他目	4	4	0	44	5	57
計	7	45	12	44	50	158

- 主題の9割は非他動詞文主語。

46

46

18Cデータ内訳

18C	Ø	ガ	ノ	ヲ	ハ	計
非他主	3	39	9	0	45	96
他主	0	2	3	0	0	5
他目	4	4	0	44	5	57
計	7	45	12	44	50	158

なお、目的語Ø4例は、主題ではない。

(4) （客一人に入れ込む遊女に対して）
郎君ひとりØまぶつてゐてはなりませぬ。
「男ひとりを大事にしていてはいけません。」

47

47

18Cデータ内訳

18C	Ø	ガ	ノ	ヲ	ハ	計
非他主	3	39	9	0	45	96
他主	0	2	3	0	0	5
他目	4	4	0	44	5	57
計	7	45	12	44	50	158

- ガ（ノ）<非主題>vsハ<主題>が最も大きな対立。
  ＝その主語が、主題か非主題かを重視する体系。
（→主語は、主題になることが頻繁であるため。）

48

48

18Cデータ内訳

18C	Ø	ガ	ノ	ヲ	ハ	計
非他主	3	39	9	0	45	96
他主	0	2	3	0	0	5
他目	4	4	0	44	5	57
計	7	45	12	44	50	158

- 目的語は、ほとんど主題化されない。
  （「ヲ」vs「ハ」はそこまで大きい対立ではない。）

49

49

18Cデータ内訳

18C	Ø	ガ	ノ	ヲ	ハ	計
非他主	3	39	9	0	45	96
他主	0	2	3	0	0	5
他目	4	4	0	44	5	57
計	7	45	12	44	50	158

- 目的語は、ほとんど主題化されない。
  （「ヲ」vs「ハ」はそこまで大きい対立ではない。）
- 「ヲ」は、主／目の弁別に寄与しているわけでもない。
  ⇒「非主題・目的語標示」として、あまり機能していない。

50

50

19Cデータ内訳

19C	Ø	ガ	ノ	ヲ	ハ	計
非他主	8	17	3	0	20	48
他主	0	2	2	0	0	4
他目	32	0	0	2	1	35
計	40	19	5	2	21	87

51

51

19Cデータ内訳

19C	Ø	ガ	ノ	ヲ	ハ	計
非他主	8	17	3	0	20	48
他主	0	2	2	0	0	4
他目	32	0	0	2	1	35
計	40	19	5	2	21	87

- 「ヲ」はほぼ使われなくなり、目的語は主にØへ。

52

52

19Cデータ内訳

19C	Ø	ガ	ノ	ヲ	ハ	計
非他主	8	17	3	0	20	48
他主	0	2	2	0	0	4
他目	32	0	0	2	1	35
計	40	19	5	2	21	87

- Øに対する「ヲ」に焦点機能？

(4) （複数の遊女がいる中で、久野を退出させようとする）
久野はんを一寸かんにんして。
「久野さんをちょっと許して（退出させて）」

53

53

19Cデータ内訳

19C	Ø	ガ	ノ	ヲ	ハ	計
非他主	8	17	3	0	20	48
他主	0	2	2	0	0	4
他目	32	0	0	2	1	35
計	40	19	5	2	21	87

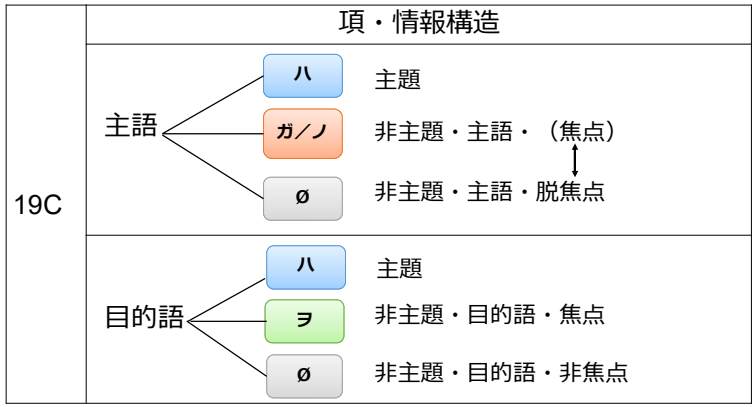
- 主語のØにも傾向…ハもガも使えない文（脱焦点）

(5) 弟Ø来たか姉じや人
（「弟」は初出。誰がという情報と来たかどうかの情報が等価）
⇒Øvsガにも焦点標示機能か。

（ただし、主語+ガは、必ずしも焦点解釈というわけではない。
主語Øの脱焦点化と相対的に焦点的ニュアンス）

54

54



55

55

まとめ

- 京都方言の有標主格はいつ成立したか。
  →19Cまでには成立。
- 京都方言が有標主格となったモチベーションは。
  →主／目の相互識別ではなく、情報構造上の識別。
- 京都方言の有標主格が成立したプロセス。

Ⅰ：項標示と情報構造標示は別スロット→格配列は有標対格性
Ⅱ：属格の主格化で、項標示と情報標示が対立→徹底有標へ
Ⅲ：情報構造優先で過剰標示の整理→対格無標化

56

56

参考文献

- 金水敏 (2011)「統語論」『シリーズ日本語史３文法史』岩波書店
- 竹内史郎 (2008)「古代日本語の格助詞ヲの標示域とその変化」『国語と国文学』85-4
- 築島裕 (1963)『平安時代の漢文訓読に就きての研究』東京大学出版会
- 野村剛史 (1993)「古代から中世の「の」と「が」」『日本語学』12-11
- König, Christa. 2006. Marked nominative in Africa. *Studies in Language* 30(4), 655–732
- Cysouw, Michael. 2005. Marked Absolutive and Marked Nominative Case Systems in Synchronic and Diachronic Perspective. In Grammatik und Verarbeitung verbaler Argumente. Antrag auf Forderung einer DFG-Forschergruppe ¨ , pages 89–110, Leipzig: Universitat Leipzig, MPI f ¨ ur Kognitions- und Neurowissenschaften, ¨ MPI fur evolution ¨ are Anthropologie

57

57